

インタビューレポート2

interviewer
文部科学省大臣官房政策課 荒井 寛
兵庫県宝塚市子ども未来部子ども室子育て支援課
前田政子係長・山西里夫社会教育指導員
仁川小 放課後遊ぼう会
足立典子代表

仁川小 放課後遊ぼう会の取組

足立代表 放課後遊ぼう会は、平成13年から本格的な子どもたちの居場所づくりに取り組んできており、文部科学省における放課後子ども教室推進事業の創設後、現在の形態となっています。山西指導員 学童保育は、両親が働きに行く家庭では3年生まで保育を行っています。しかし、子どもが4年生になれば、放課後の居場所がありません。その場合はどうすべきかという話から、子どもたちの居場所作りが始まりました。その後、兵庫県でもパイロット事業を行い、文部科学省の「地域子ども教室事業」から発展的に放課後子どもプラン事業が開始され、当会の取組につながりました。

前田係長 そのような流れから平成19年から始まったこの「放課後子ども教室」を、宝塚市としても全校区に広げようと努力をしています。地域主体ということもあり、すべての校区には広がっていないのが現状です。ただし、年々開設校区は増えており、この流れを広げたいと考えています。宝塚市では、3種類の放課後子ども教室の実施形態があり、各地域の実状に応じて運営をしています。地域の方がかかわることにより、学校以外でも子どもたちが地域の方と触れ合い、学校内だけではない広がりをみせています。市としても、期間が決められた事業としてとらえていましたが、今後も継続を希望しています。



足立代表 当会は、子どもには居場所や遊び場が必要という思いを持つ保護者が集まりボランティアグループを立ち上げ、国や自治体の支援なく、自分たちで何とか作ってみようということとで始まりました。その後始まった県のパイロット事業（子どもの冒險ひろば）では、県で雇用したプレリーダー（2名）が、毎日当会に来ていたいただきました。パイロット事業自体は2年間で終わりましたが、好評であったため、県が補助事業としました。その間、他の校区にも事業を広げることになり、市内の半分以上の学校で出張開催を続けました。子どもたちがたくさん集まり、生き生きと遊ぶ状況を見た各校区のPTAや地域の方々が、ぜひ自分たちでも続けたいという声があがり、多くの小学校でボランティアグループが立ち上がることになりました。当初は、それぞれの地域にプレリーダーが向向き、文部科学省の事業である「地域子ども教室事業」でプレリーダーに費用を支払っていましたが、市内の6校区が集まり、新たに会を作り、会としてプレリーダーをきちんと雇用する形態を作ることになりました。現在は、文部科学省および兵庫県からの補助金を主体として、プレリーダーを10名雇用しています。ただし、県の事業が今年度で終了予定の

ため、予算的に非常に厳しい状況です。子どもたちの育ちには、やはり自由な遊びが必要と感じます。したがって、大人が干渉せずに自分たちがやりたい遊びを思い切りできる場を作り育てたいと考えています。当会の方針は、プレリーダーと同じで「自分の責任で自由に遊ぶ」にあります。プレリーダーという専門職のスタッフを雇用して、きちんと安全管理をして、子どもたちが自分で色々な挑戦や冒険ができる部分を大切に自由に遊べる場を維持できるように頑張っています。なお、現在1日の利用数は、平均65名で、過去多い時で250名程度の時もありました。月に1、2回以上参加している子どもが1、3年生では半分以上から7割、5、6年生でも4分の1は月に1、2回以上は来ています。毎日開催することで、少しの時間に利用できる、多くの子どもが参加できる体制となっています。



ついたなど、この活動が楽しくて学校も楽しくなったという意見が寄せられます。また、それまで孤立しがちであった子どもたちの貴重な居場所にもなっています。

実施形態と宝塚市内での広がり

「放課後子ども教室」には地域によってさまざまな実施形態があります。当会のメリットを教えてください。足立代表 先日、文部科学省の大会に出席させていただき、色々な教室があることを実感しました。私たちは、地域の住民や保護者を中心となってボランティアグループをつくっており、そのことに大きなメリットを感じています。

行政主体の場合もありますが、どうしても安全面など、行政にはやってもらって当たり前のような感覚が生じがちになりますので、私たちは、保護者などがボランティアで遊び場を開催していることから、けがをしても自分の責任であるということが、自然と受け止められます。また、子どもの遊びを管理するプレリーダーの存在は、保護者やボランティアが長く気軽ににかかわることにもつながり大きなメリットとなっています。

前田係長 宝塚市内で「放課後子ども教室」が立ち上がっていない校区については、核になる方の存在とPTA等の協力がどこまで得られるかが課題です。各地域でこの事業がどのように位置づけられるか、重要性が浸透しきれていないことも否めません。継続性という観点から考えますと、熱意を持つ方が中心となる必要があり、しかも地域の方だけではなく、学校や保護者なども巻き込む必要があります。皆が協力して実施する気運が高まらないと成り立たないです。継続もできないのが現状だと思います。市としては、「放課後子ども教室」の実行委員会などに足を運び、他の校区の紹介などをして、その運営方法などについて相談を行っています。

山西指導員 宝塚市では、「放課後子ども教室」の開設、運営は、各校区単位で実行委員会を形成します。実行委員会の構成は、基本的に保護者世代と地域の二者が入った組織です。実行委員会が主体となって開催回数や開設場所を決めます。場所は学校になりますので、学校には業務上支障のない範囲で最大限協力をいただきます。運営の中の色々な困難に行政としてできることを最大限支援する方策をとっています。運営上、週に2、3回開催するには、やはり、プレリーダーのような人材の配置が必要になります。そのような人材が核になって地域のコーディネートや開設の手法となるプランを責任をもって立てる人が求められます。現在は、保護者世代が働きに行く家庭が増加し、そのような中でPTAの役員をするだけでも負担感があります。やはり、そこをどう打開していくかについて、何らかの条件整備が必要になっていると感じます。

文部科学省に期待すること

足立代表 必要となる常設の遊び場がきちんと開設できるような補助・支援をお願いしたいと思います。やはり、ボランティア主体では常設は非常に難しい部分があります。どの学校でもやろうと思えば着手できて、そして、継続できるように、補助を充実させていきたいと思います。

今後の取組

足立代表 今後は、この活動を必要としているすべての校区に、常設の遊び場づくり、リーダーのいる「放課後遊ぼう会」の活動を広げていきたいと思っています。また、各校の活動内容を深めていきたいと思っています。やはり、地域の人にはまだまだ浸透していないのが現状ですので、子どもたちのために必要なものであるということを多くの方に理解いただき、多くの方が気軽にかわっていただけるように、より子どもたちを地域で見守れるような活動を続けていきたいと考えています。

